

聖徳太子は実在したのか

近年、「聖徳太子はいなかった」という論説が発表され、マスコミの注目を浴びるようになった。その主張は、奈良時代の養老4（720）年に成立した『日本書紀』に法隆寺系の伝承が採用されていないことを論拠として、天平期における法隆寺東院の再興に関係した光明皇后や行信らによる「捏造」を推測するものである。したがって、『日本書紀』および法隆寺系の史料からは「聖徳太子」の実在性を証明できず、それ以前には存在しなかったとする。しかしながら、用明天皇の子たる厩戸王(子)の実在性までは否定せず、斑鳩宮や法隆寺(若草伽藍)を造営した点は承認する。厩戸王(子)と聖徳太子を峻別し、通説のような史実と伝説との連続性を全く認めない点に特色がある。

虚像と実像の区別 すでに、「聖徳太子」の「虚像」と「実像」を区別する動きは明治時代から存在した。近世以前の「聖徳太子」像は、平安期に成立した『聖徳太子伝暦』に集約された日本仏教開創の偉人として位置づける「太子信仰」を前提としていた。そこには、奇蹟や予言を行った神秘的な超人としての位置づけが強調されていた。とりわけ平安末期以降は、浄土信仰の発展に伴って太子は往生者の魁けとされ、救世観音の化身とし、西方浄土への導き手として尊崇された。これに対して久米邦武は、虚実まじった太子伝の真相を明らかにするため文献批判を行い、諸史料を甲(確実)、乙(半確実)、丙(不確実)の三種に区分して考察した。以来、実証的な研究は少なからず史料の序列化を行ってきたが、戦前には、「確実な史料」としての『日本書紀』の記載に基づき、明治維新とともに評価された「大化改新」を準備し、中国と「対等外交」を成し遂げた偉大な政治家としての位置づけが強調された。この点は基本的に戦後の教科書叙述にも継承され、推古朝の政治を「聖徳太子の政治」として総括する点に端的に示されている。さらに現在でも小学校の教科書に顕著な人物重視の叙述には、『聖徳太子伝暦』に集約された超人的な伝承が記載として残されている。

金石文・法隆寺系史料の分析 戦後には、津田左右吉以来の「記紀批判」により、戦前には「確実な史料」とされた『日本書紀』に対する信頼性がゆらぎ、金石文や法隆寺系の史料が重視されるようになった。その結果、『日本書紀』が記す「撰政」「皇太子」の内実疑問が提起され、推古女帝のもとでの蘇我馬子を中心とする共同統治との理解が通説化した。一方では、十七条憲法にみえる「和の精神」が平和国家・文化国家建設のスローガンとして評価され、一万円札の図柄としても長く存続した。

このように「聖徳太子像」の変遷と実証的な研究動向を総括するならば、近年の「虚像」としての「聖徳太子」を否定する議論は、戦後においても十分払拭されていない『日本書紀』の拡大解釈にもとづく「偉大な宗教家・政治家」としての位置づけに対して根本的な批判を加えたものと考えられる。

「偉人化」の開始と今後の問題 けれども、その史料批判の方法にも問題がないわけではない。すでに、奈良時代の前半には上宮太子を「聖徳」と称するのは死後に与える諡(おくりな)とする理解があり、さらに、慶雲3(706)年以前に「聖徳皇」と呼ばれていたとする金石文もある。加えて『古事記』には没後の名前と考えられる「豊聡耳」の称号、および「王」号ではなく後に即位した王子にのみ与えられる「命」表記を含む「上宮の厩戸豊聡耳命」の記載があり、遅くとも『日本書紀』成立以前の天武朝までには偉人化が開始されていたことは明らかとなる。このように『日本書紀』や法隆寺系以外の史料からも初期の太子信仰が確認されるので、法隆寺系史料のみを完全に否定することは無理があると考えられる。推古朝の有力な王子たる厩戸王(子)の存在を否定しないにもかかわらず、後世の「聖徳太子」と峻別し、史実と伝説との連続性を否定する点も問題となる。

ちなみに、「聖徳太子」の表記は、『日本書紀』には見えず、奈良時代中期に成立した『懐風藻』が初見であり、同時代的には厩戸王(子)や上宮王がふさわしい。

(国立歴史民俗博物館助教授 仁藤敦史)